

<b>学校教育目標</b>	社会で通用する基礎・基本を磨き、 よりよい自分・学校・社会を目指す生徒の育成		
a ミッション 【地域・社会における 本校の使命・存在意義】	地域に誇れる学校づくり ～ 地域からの期待に応え、期待を超える学校づくりを ～	a ビジョン 【実現しようとする 本校の将来像】	○オール因島南（学校・家庭・地域）で、連携・協働し、生徒を育む学校 ○学校・地域（ふるさと）を誇り、自分の生き方を見つめ直すことに繋げる学校 ○社会の変化に対応し、向上心を持ち、思いを実行に移せる学校

尾道市立因島南中学校

評価計画					自己評価				学校関係者評価			改善計画		
b 中期経営目標	c 短期経営目標	d 目標達成のための方策	e 評価指標	f 目標値	7月	1月	h 達成度	i 評価	j 結果と課題の説明	k 二次評価			l コメント	m 改善案
					g 達成値	g 達成値				イ	ロ	ハ		
育成する資質・能力 「基礎・基本の力」「思考力・表現力・対応力」「高い志とチャレンジ精神」	本質的な問いを工夫し、授業をファシリテートできる教職員の育成。	【授業改善の推進】 ○授業のめあて、振り返りとゴールイメージを持ち、授業をファシリテートできる教職員の育成。 ○学習課題（ミッション）として本質的な問いを工夫し、生徒の意欲や探究心を高め、表現力を育成する。 ○タブレットと電子黒板を活用した授業づくりの推進 ○これらを活用した授業スタイルの確立	教師アンケート めあて・ミッションを常に提示 毎時間の振り返りシートの実施 週1回の電子黒板・大型ディスプレイの活用	100%	96.3%	98.8%	98.8%	B	アンケートの結果から、めあて・ミッションの提示と毎授業の振り返りの実施が本校の授業スタイルとして定着している。定期試験でもミッションを提示するようになった。授業内容によって電子黒板を使わなかったり、時間が足りず時間内に振り返りができなかったりしたことがあった。	○			・デジタル機器の活用は本当に有効だと思いますが、活用の仕方を間違えると課題を抱えている生徒には更に課題が大きくなるという危険もあると思います。デジタルとアナログのバランスが大事なところだと思います。	因島南中学校の授業スタイルをさらに洗練するために、タブレットや電子黒板をどのように活用すれば良いか研修を進める。どの場面でもデジタル機器が有効なのか、また、電子黒板と従来の黒板の組み合わせによる活用や、生徒やクラスの課題に応じてどのような活用が望ましいのかを模索・検討していく。
			生徒アンケートQ1～10「〇〇の授業は、「できた」「わかった」と感じることがある。」と答えた生徒の割合（全教科平均）【7月・11月実施】	85%	80%	78%	91.8%	B	美術は1ポイント上がり、他教科は1～8ポイント下がった。特に1年生が1学期に比べて全教科合わせて4ポイント下がっており、各教科の難しさを感じていることが原因の一つだと考えられる。授業研究の指導案検討や全国学力学習状況などの調査分析、生徒の実態から指導方法を工夫し、ミッションをよりよくしていくなど、授業改善に取り組んだ。	○			・教師のやっているつもりが生徒には届いていないことが多いものです。南中タイムなどの意識づけを!! ・提示している学習課題についての生徒の受け止めはどうなのでしょうか。生徒の「できた」「わかった」の思いをできるだけその場でつむむことができていると、生徒が「できた」「わかった」と思える授業作りを進める。	生徒の「できた」「わかった」の思いだけで評価するのではなく、教員の想定する試験の平均点とその結果を指標の一つに挙げることで、本当に学力が定着しているのかを検証する必要がある。そのためには毎週の南中タイムを充実させ、学習する習慣を身に付けさせるとともに、生徒が「できた」「わかった」と思える授業作りを進める。
			自主学習評価シートの週1回以上の活用	80%	18.9%	58.5%	73.1%	C	全教員が「自主学習評価シート」の取組を行っている。学習発表会ではその取組を展示した。一方で、週1回しか授業のない実技教科が自主学習評価シートを週1回以上活用することが難しい現状も分かった。評価指標を見直し、基礎学力の定着に向けて適切な評価を目指す。	○			・学びに向かう力の評価材料を新たな指標を作ってストックしていくには、労力がかなりすぎるのではないのでしょうか。現在の資料が1つの観点にならないか検討してみたいかがでしょうか。	・主体的に学びに取り組み態度を評価するためには、教科性の違いもあるため一律に同じ方法で見ることが難しい。これまでの学習活動の取組とどのように見ればよいのか、どのようにすれば「学習を調整する力」を育成できるのか、学校の取組として今後もよりよい評価の仕方を模索していく。
			単元末に単元テストの実施	100%	100%	100%	100%	A	南中タイムや単元ごと、毎授業の小テストなどで生徒が自身の学びを振り返り、自分の学習を調整する機会を与えるとともに、教員も日頃から評価することで生徒実態を把握し、授業改善を進めた。	○			・単元テストを実施されているだけでも大変なことだと思います。授業進度と回数の兼ね合いなど苦労された部分も多かったのではないのでしょうか。	南中タイムと単元テストが重なり、生徒や教員にとって大きな負担となる場面があったが、学校での学習と家庭学習をつなぐこの取組は、教科や学年での授業数の違いを考慮するなどしながら今後も進めていく。
豊かな心の育成	学校・地域（ふるさと）を誇り、自分の生き方を見つめ直すことができる生徒の育成。	【ふるさと学の推進】 ○各教科、道徳、特別活動と総合的な学習の時間「ふるさと学」を関連させる。 ○学んだことを積極的に発信し、自己表現する意欲や力を高める。 ○南中タイムの表現活動の時間設定	調査問題の全国の正答率以上 1年生：標準学力調査4月 2年生：標準学力調査4月 3年生：全国学力・学習状況調査5月	100%	96.4%	96.4%	B	学力調査等の分析により、3年生は特に生徒間の学力差が大きいこと、知識・技能を活用し、様々な表現方法で表すことに課題があることがわかっている。各学年が学力調査やアンケートの折衝を行い、授業改善につなげた。	○			・生徒の学力を中心とした「二極化」の課題について、保護者や地域を巻き込んだまさに「オール因島南」で解決に向けた対策づくりが必要だ。	本校の生徒は様々な表現方法で表すことに課題がある。自己表現など入試でも求められる力が明確になってきている中で、生徒も教員も学校全体で教科横断的に授業改善を進める。コロナ禍ではできなかった取組を考え、知識・技能を活用して表現する場を設ける。	
			生徒アンケートQ31「自分達の学んだことを人生や社会に生かそうと思う」生徒の割合【7月・11月実施】	95%	90.0%	88.0%	92.6%	B	コロナ禍で中止されていた職業人講話や学習発表会での総合的な学習の時間の発表を実施した。3年生が1、2年生に1人1研究を発表するなど、ふるさとで学んだ事を発信する機会を作ることができた。積極的な生徒会活動や部活動や駅伝部での取組も肯定的な生徒の回答につながっていると考えられる。	○			・この項目の評価が高くなることは非常に重要だと思います。外部と関連した学習内容を今後も積極的に導入されてみてはいかがでしょうか。 ・因島南中の良い様子が地域で話題になるように情報提供があるといいと思います。地域のボランティア活動などは公民館などで伝える場面があってもいいと思います。公民館での展示も、文化祭だけでなく有効に活用してもらったらいいと思います。	・3年生の卒業証書授与式での姿を後輩に見せることができた。行事や生徒会の取組、部活動などの学校の伝統や文化を引き継がせる。 ・総合でのふるさと学や道徳、学活で学んだ事を発信する機会や情報提供の場を作る。
魅力ある学校づくりと働き方改革の推進	常に向上心を持ち、実行できる生徒の育成。	【向上心・実行力の育成】 ○「特別な教科 道徳」の充実 ○「フラスワ作成・助言→取り組み・実践→自己評価・他者評価→反省・改善→新たなフラスワ作成」のサイクルの定着と充実に向けた指導を進める。 ○教材ごとに教材吟味シートで吟味を重ね、生徒実態を踏まえた道徳の授業づくりを進める。	毎月の「重点項目を守って生活している」生徒アンケート集計【毎月実施】	90%	86.4%	89.0%	98.9%	B	毎月の重点項目「一点突破」では、その取組の意義や意味を生徒たちに考えさせた上で、取組を進めた。月末には、自分自身と学校について評価させた。このサイクルが定着している。	○			・学校評価全体について、この評価活動を一過性（点）で終わるのではなく、情報共有や課題解決に向けて、是非、線や面を感じるような活動に継続してほしい。	本年度定着した「一点突破」のサイクルに加えて、生徒会活動と更にリンクさせることで、良い意味での生徒たちの「盛り上がり」を仕掛ける工夫を行っていく。また、学校評価で出た意見について教職員で情報共有を図り、その後の取組を検討する視点に反映させる。
			生徒アンケートQ23「みんなで何かに取り組み、やって良かったと感じることがある」と捉えている生徒の割合【7月11月実施】	90%	88.0%	83.0%	92.2%	B	適切な試練を乗り越えた時や活動による成果が目に見えた時、生徒の生き生きとした姿が見られた。取組が終わった時に、生徒たちにとどんな思いを抱かせたいのかを明確にして、計画を考え、実践していく。	○			・因島南中の生徒の活動を直接見る機会がなく地域の中でも因島南中の活動や生徒の様子について話をすることも少なくなっていると思います。	様々な行事や活動における生徒の生き生きとした姿を通信やホームページを通して発信していく。保護者や地域の声が伝わる方法を模索・検討することを試みる。
			【不登校の未然防止】 ○生徒理解・学級への帰属意識を高める集団づくりの推進 ・面談、アセス活用、学級経営の充実 ○不登校生徒への支援の充実 ・教育相談室生徒への計画的な支援 ・家庭連携の充実と、SCやSSWと連携した取組を進める。 ○全職員・全生徒の全員面接の実施	アセスの結果「友人サポート」と「教師サポート」の因子50以上の生徒の割合【7月11月実施】	70%	71.4%	67.1%	95.9%	B	全生徒と全教職員による「絆面接」を2学期も実施することができた。生徒と教職員のつながりが広がり、深まった。 「アセス」の学級データと生徒の個人データをもちに、校内研修を行った。その結果の要因や支援策を協議した。	○			・生徒指導は大変なのは理解できました。面接を大切にされていることを継続してほしいと思います。
生活習慣の改善ときめ細やかな見取りと対応による不登校生徒の減少	新たな不登校生徒を出さない。（昨年度13人）昨年度不登校生徒のうち好ましい変化が見られるようになった生徒数の増加【毎月集計】	100%	25.0%	37.0%	37.0%	D	毎日、出席状況を記録し、家庭訪問のタイミングを計り、家庭との連携に努めた。教育相談室（別室登校）を組織的に運営し、きめ細やかな支援に努めた。しかし、本年度新たに不登校になった生徒が、12月末で4人になった。不登校生徒の中には、SCのカウンセリングやSSWの働きかけが登校の後押しになっている生徒もいる。	○			・不登校の未然防止に対して、アセスの結果だけでは取り組みが不十分。安定した学校環境や学級の風土づくりで学級への満足度や自己開示の機会を!!	「アセス」の結果分析をもとにした支援策の協議は、今後も継続していく。その上で、「居場所づくり・絆づくり」を意図的に仕組み、支持的風土づくりを進めていく。		
魅力ある学校づくりと働き方改革の推進	働き方改革の意識を持ち、個々の教職員が業務改善に取り組むことで生徒が、生き生きと生活を送ることができる学校づくり	【働き方改革の推進】 ○働き方改革の意識向上 「自分も起点」という位置に立ち、協働して取り組む教職員組織の育成。 ○超過勤務時間の削減 ○退校時刻の設定と30分前の声掛け	働き方改革アンケート肯定的評価全項目の肯定的評価平均80%以上【毎月実施】【市：6月・11月実施】	80%	65.2%	72.1%	90.1%	B	達成度は90%を超えているが、達成値72.1%は、市の平均と比較しても8.6ポイント低く課題である。しかしながらアンケート10項目のうち7項目が上がったことを前向きに受け止め、これからも職員の内身が健康であるとともに、充実感をもって働けるように改革を進めたい。	○			・新しいアイデアやスクラップ&ビルドなどは、コロナ禍では難しかったと思います。この3年間で蓄積した成果と課題を踏まえて、来年度は新しい風が因島南中に吹き込むことを期待します。	・働き方改革のねらいである「生徒と向き合う時間の確保」の向き合う時間とは何かを今一度議論したい。 ・職員からのアイデアや工夫を取り上げ、主体性のある職場づくりに繋がりたい。
			水曜日の定時退校日の実施	80%	39.1%	79.0%	98.8%	B	18時退校の実施率を指標とし、前期の39.1%に対して後期は79.0%と40ポイント上昇した。	○			・週1回の実施は今後も努力していく必要がありますね。 ・「学校だより」が視覚的に入りやすく充実している。今後は学校の教育方針や学校理念などをアピールしていったらいいのでは。	・不祥事防止の観点から、かける時間も労力も倍増している。ICTの活用と職員の意識改革により、効率を上げて心身ともに健康に勤務できる風通しの良い職場を目指します。
			時間外勤務月45時間以下を6カ月以上実施	80%	16.7%	21%	D	4月から12月までの9か月間のうち6か月45時間以下だった職員は3名だった。	○					

【自己評価 評価】  
A：100≦（目標達成）  
B：80≦（ほぼ達成）<100  
C：60≦（もう少し）<80  
D：（できていない）<60

【外部評価】  
イ：自己評価は適正である。ロ：自己評価は適正でない。ハ：わからない。